2019年3月24日

福音書からのメッセージ

園丁は答えた。『御主人様、今年もこのままにしておいてください。木の周りを掘って、肥やしをやってみます。
（ルカによる福音書13章8節）

わたしたちは紫のこの期節に、悔い改めという言葉をしばしば聞きます。悔い改めと聞くと、自分が犯した罪を認め、反省することであると思いがちですが、キリスト教では、単に、悪かったなと思うことではなく、「心の向きを変える」ことを意味します。今まで神様からそっぽを向いていた、あるいは神様の方向がもはや分からなくなっていた自分自身を神様の方へ向かせる、向き直るということです。

自分はいま、どの方向を向いているのか。神さまに向かわずに、自分の思いを大切にし、欲望のままに生きてはいないだろうか。祈り、み言葉に聞く中で、わたしたちは自分自身に向き合いながら気づき、神さまに向き直る。それが悔い改めです。

前半の箇所には、このような言葉が二度繰り返されています。「決してそうではない。言っておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる」。何がそうではないのか。それはいわゆる「因果応報」という考え方に対してです。この世的な災いや病、貧困や突然の死。それらは神さまからの罰だと考えられていました。

逆に言うと、そのような災難にあっていない自分たちは、神さまに祝福されているのだということです。イエス様は、そう考える人々に「決してそうではない」と言われるのです。誰もが悔い改めなければ、例外なく滅びるというのです。とても厳しく、怖いメッセージです。ではわたしたちは一体どうしたらいいのでしょうか。

イエス様は続けて、ぶどう園に植えられたいちじくの木の話をされます。三年経っ

ても実を結ばないいちじくの木を見て、ぶどう園の主人は園丁に言います。「切り倒してしまえ」。しかしその言葉を聞いた園丁が、「いや、今年もそのままにしておいてください。来年は実がなるかもしれません」と言って執り成すというものです。

もしわたしたちがいちじくの木だったとしたなら、恐ろしくて震えながら日々を過ごしていくしかないでしょう。実を結ぶことができないわたしたちは、しかし園丁の姿に一筋の希望を見いだします。園丁は「今年もそのままにしておいてください」と言いました。それに合わせてこのようにも言ってくださいます。「木の周りを掘って、肥やしをやってみます」。つまり、世話をするというのです。すくすくと育つように、栄養が行き届くように、肥やしをやると言ってくれるのです。いちじくの木に、手を掛けてくれるのです。もしわたしたちがいちじくの木ならば、この園丁の姿は、イエス様の姿と重ならないでしょうか。

いつまでたっても実を結ぶことができない。今にも切り倒されそうな自分を守り、そして関わってくださる方がいる。丁寧に気の周りを掘り、肥料を与え、恵みを与え、「早く実をつけなさい」と語り掛けてくださるイエス様。そのイエス様がいてくれるから、神さまの方を向き、実をつけたい。そのように心から思えるのです。

桃山基督教会

〒612-8039
京都市伏見区御香宮門前町184
TEL/Fax　075-611-2790
メール momoyama.kyoto@nskk.org
＜教会ホームページ＞
http://momoyama.hannnari.com/